

Report on the Villages in North China (1) : the Shonxi Province Viillages in December 2007

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17342

華北農村訪問調査報告(1)

——2007年12月、山西省太原市・霍州市農村——

弁 納 才 一

はじめに

2007年12月下旬、山西大学中国社会史研究中心の協力を得て、山西省中部に位置する太原市近郊農村と霍州市遠隔地農村において予備的な聞き取り調査を行うことができた。

太原市近郊農村のうち、剪子湾村と赤橋村はすでに山西大学中国社会史研究中心が調査を実施して事情を承知していることから山西大学側が紹介してくれた村であり、戦前に日本側が調査を行った黄陵村と中国側から村志が刊行されている小店村は筆者が訪問を希望した村である。剪子湾村については調査に基づく研究論文がいくつかあり¹⁾、赤橋村については調査に基づく研究書がある²⁾。また、黄陵村については戦前に日本側が調査を行って報告書が刊行されており³⁾、小店村については中国で刊行された村史を購入していた⁴⁾。太原市近郊農村は従来の筆者の主要な研究対象地域である華中の都市近郊農村との共通点をも看取しうる地域である。

一方、霍州市遠隔地農村ではまず霍州市水利局を訪問して水利に関する概括的な説明を聞いた後に、洪洞県と霍県に跨る「四社五村」の中の霍県義旺村を訪問した。内山雅生氏(宇都宮大学国際学部教授)と祁建民氏(県立長崎シーボルト大学[現長崎県立大学]国際情報学部准教授)は、すでに2006年8月下旬に同じ四社五村に属する隣県の洪洞県橋西村を訪問して村書記に話を聞いていたので、比較する意味もあった。なお、この四社五村は中国側とフランス人研究者によってすでに調査が行われており、報告書も刊行されている⁵⁾。

この点については、内山氏より情報を提供されていた。このため、四社五村は内山雅生氏が強く訪問を希望し、祁建民氏も強い関心を持っていた村である。なお、霍州市水利局における聞き取り調査については祁建民氏によるメモ書きを参照してまとめた。

今回の予備調査が可能になったのは、2007年8月後半に山西省南部地域に位置する臨汾市近郊農村の高河店村における聞き取り調査⁶⁾を行った後に、山西大学中国社会史研究中心に立ち寄って共同研究の可能性を探る交渉を行っていたからである。その際に山西省を訪問していたメンバーのうち、今回の予備調査に参加したのは内山雅生・祁建民の両氏と筆者の3人である。

よって、本稿は、上記の3人による聞き取り調査の成果に関する報告であって、とりあえず筆者がとりまとめをしたにすぎない。このため、本稿の内容については内山雅生・祁建民の両氏に一応了承を得てはいるが、文責はあくまでも筆者にある。

1 太原市農村

(1) 杏花嶺区楊家峪剪子灣村

時間：2007年12月14日午前

聞き取り場所：剪子灣村村民委員会

聞き取り対象者：尹万智(69歳，村の元会計)，薛銀宝(62歳，元村長)，
郝繼忠(元民兵指導・生産小隊会計，64歳)，
王栓富(村の元会計，64歳)(写真1を参照)

写真1．尹万智・薛銀宝・郝繼忠・王栓富



農地

- ・人民公社時代は350～360畝あったが³、1987年には260畝となり、現在は耕地はなく、農業従事者もない。

人口

- ・1966年、269人→2007年現在、845人(「老村民」約400人、「新村民」約400人)

仕事

- ・村外へ：出稼ぎ、商店勤務、運輸業従事。
- ・村内で：村(政府)が建設した新華実験中学校(私立)で働いたり、建築業・メンテナンス業に従事する。他に、団地(3分の1は本村民、3分の2は村外人が居住)の警備・掃除や村内の掃除の仕事もある。

民兵

- ・現在は青年を人民解放軍に推薦するのみであるという(写真2を参照)。

治安弁公室

- ・村内の見回りや治安維持をしている。

食事

- ・食糧(穀物)や蔬菜はすべて購入している。蔬菜は付近の村民が売りに来る。蔬菜販売店(付近の村民の個人所有)もある。

老村民への補助

- ・60歳以上の者は村政府と太原市政府から毎月各100元ずつ合計200元を支給され、年に1回は旅行に出かけることもできる。

写真2. 民兵を顕彰するたて



- ・年に2回、村(政府)から米・小麦粉・食用油を支給される。支給量は、1回1人当たり米25kg・小麦粉25kgと1戸当たり食用油5kgである。

村の財源

- ・村経営の私立中学校から上がる収益は年間約300万元になる。来年からは400万元に達する見込みである。
- ・村の中を通る高速道路の近くに建つ高層マンションの1～3階は村の所有で、店舗となっており、年間約100万元の収益がある。
- ・村で股份公司(株式会社。村民が株を所有)の設立を計画しており、現在、これに関する法律を太原市政府が作成中である。
- ・村民からの徴税はない(住民税などがないという意味か)。村民の商店などの経営者に対しては国家の工商局が徴税する。
- ・村から村民企業に対しては不動産の無償貸与などの補助制度がある。

社会保障

- ・60歳以上の村民は、医療費が無料で、現在、社区病院の建設を計画している。

飲用水

- ・昔は深さ1,200mの井戸を掘ったが、水質は不良だった。下水は、太原市街地と連結している。来年(2008年)には都市上水道が完成する予定である。

聞き取りが終わった後、村内を案内してもらった。村の一画には次々とマンションが建設されていた。日中戦争期、村のはずれには日本軍の弾薬庫があり、太原東駅には日本軍警備隊が駐屯していたという。現在は、そこに共産党の軍関連施設があるとの説明を受けた。

急速に都市化が進行した農村であるという印象を強く受けた。ただし、事実上、旧村民と新村民が並存している状況にあることが興味深い。

(2) 小店街道黄陵村

時間：2007年12月14日午後

写真3. 石範一

聞き取り場所：小店街道黄陵村弁公処

聞き取り対象者：石範一(86歳, 1921年生まれ)

(写真3を参照)



- ・1937年10月4日, 日本軍が入村した。日本軍は6人くらいの村民を殺し, 2人の女性(70歳余りの老婆と15~16歳の少女)を強姦し, 鶏・牛・羊も略奪したので, 村には鶏がほとんどいなくなった。
- ・1938年(17歳の時), 太原へ移住し, 大興号という菓子作りの店で働き, 2~3か月に1回は村に戻ってきたが, 村は日本軍の「強化治安」地区になっていた。
- ・日中戦争中, 日本軍が村に深い井戸を掘ったが, 我々はそれを「大洋井」と呼んでいた。
- ・1945年に村に帰ってきて農業に従事した。日本軍が撤退した後に村に戻ってきた閻錫山軍に強制的に入隊させられ, 途中逃げたものの, 捕まってしまう, 太原市北門の武宿飛行場で3~4日働かされた。だが, 母方の兄弟たちが借金して用意した銀元200円で解放され, 村に戻ることができた。なお, 妻の実家は武宿である。
- ・1949年以前, 隣の家同士で「変工」(労働力・家畜・農具の交換)が行われていた。小麦・高粱・蔬菜・谷子(粟)・玉蜀黍などを栽培していた。汾河から龍首渠を掘った。深さ15mの「水井」(井戸)を掘った。解放後, 「機井隊」が深さ約60mの井戸を約60か所掘った。
- ・1949年, 太原が解放される時, 村の周辺で戦闘があった。解放軍が太原市内から周辺の村に向けて砲撃し, それが村の果樹に当たった。
- ・1953年, 共産党青年団の団員の呼びかけによって, 10数畝の農地を所有する中農として仲の良かった11戸で互助組を組織した。
- ・1954年, 初級合作社→1956年, 高級合作社
- ・1958年, 12ヵ村が人民公社(黄陵公社)に組織されて蕭河の水利建設に

動員された。主に蔬菜を栽培し、稲の栽培(70~80畝)は水が不足して徐々に減少した。米が主食で自給自足でき、米を榆次(雑穀の生産地)まで持って行って雑穀と物々交換した(米1斤=玉蜀黍1.5斤)。食用油は1か月1人当たり1両を配給された。やがて、「菜区」(蔬菜のみを栽培する地域)に指定され、年間800万斤~1,000万斤の蔬菜を政府に上納した。

聞き取り中に、村の幹部やその場に居合わせた数人が頻繁に口を挟んできたために、聞き取り対象者に落ち着いて話を聞くことができなかった。また、時間の都合で村の中を参観することができなかった。

(3) 小店街道小店村

時間：2007年12月14日夕方

聞き取り場所：小店村老人センター

聞き取り対象者：李国慶(小店村党副書記，48歳)，

馬振山(共産党青年団書記長，31歳)，

韋錫恭(1969~75年の書記長，64歳)，周狗貨(71歳)

(写真4を参照)

写真4. 韋錫恭・周狗貨(前列中央)



- ・人民公社時期、小麦・高粱・玉蜀黍・大豆・粟などを栽培し、食糧は自給自足が可能だった。高粱や玉蜀黍が主食だった。1人当たりの年間小麦消費量は72斤とされ、生産量が72斤に達しなかった場合は政府が不足分を補填した。
- ・1960年、食糧不足が最も深刻だったが、村には餓死者はいなかった。食糧不足で病気になって死んだ者はいた。この時期、外からの移民はなく、村外へ転出した者もいなかった。
- ・1961～62年、1人0.2畝の自留地を与えられた。
- ・1962年頃から「菜区」に指定され、生産した蔬菜の政府への上納分と消費分以外の余剰分は政府へ提出した。
- ・1978年、レンガ工場・機械整備工場・製粉工場を設立し、1981年から生産請負制が始まった。

当該村への訪問時刻が遅くなったことに加えて、途中、停電に見舞われて十分に話を聞くことができなかった。

ただし、晩に宴会が準備されてもてなしを受け、村の発展を自負していることを窺い知ることができた。

(4) 晋祠鎮赤橋村

時間：2007年12月15日午前

聞き取り場所：晋祠鎮赤橋村悟園寺

聞き取り対象者：楊来根(59歳，元副書記長)，

王春生(60歳，1947年生まれ，元書記長)，

高継業(82歳，1926年生まれ，主な語り手)，

釈悟正(75歳，「看廟」)(写真5を参照)

写真5. (右から)王春生・高継業・釈悟正・楊来根



- ・高継業は、1949年の太原解放時に赤橋村に解放軍の指令部が置かれ、動員されて1949～62年に解放軍に入隊した。1963年と1965年に30人余りの工作隊が入村し、8つの生産隊において四清運動が展開された。
- ・王春生は、1962年に中学校を卒業し、1965年に生産大隊副大隊長、1975年に生産大隊長、1983～84年と2000年～2007年12月現在に書記長となり、1985年に村(生産隊)の製紙工場で働いた。
- ・解放前、移住者(河南省から10数戸、五台山から10数戸)が製紙業に従事した。300軒以上あった製紙工場では多くの「雇工」を雇用し、包装紙やトイレットペーパー(草紙)を生産していた。生産された紙の大部分は晋祠鎮北堡に設立された土紙の運銷合作社に集められ、一部は個人で太原へ販売した。
- ・解放前、道教の興化洞(2004年から仏教の悟園寺と改名)、藍若寺(仏教敬土宗)、儒教の文昌閣、観音堂があり、その他に一貫道の信者が2～3軒いた。1957～58年、仏像など鉄製のものが集められて製鉄が行われた。1966年、紅衛兵がやって来て廟などを破壊した。
- ・解放前は水稻の栽培が最も多く、米1斤を河東(小店村付近)や陽曲県まで運んで行って高粱3斤と交換した。稲以外に小麦・谷子(粟)を栽

培したが、主食は高粱・玉蜀黍だった。解放後、米を政府へ上納し、政府から玉蜀黍などを配給された。

- ・ 晋祠の泉の水(晋水)は1950～60年代から減少し、「水利段」が水を管理するようになり、多量の水を必要とする田植えの時は、最初に20日間だけ赤橋村が水を使用し、その後にその他の村が使用することにした。晋水の支流には南河・北河・中河・陸堡河があり、北河は智伯渠によってまず紙房村につながっていたが、数年前に晋祠賓館が建設されて村はなくなった。2年前から晋水の水が少なくなって水田も減少し、2007年現在はほとんど水稲作は行われていないという。
- ・ 赤橋村には西山炭鉱と化学工場(1950年代に設立)がある。

写真6. 太原南郊赤橋村「千万元村」



写真7. 拳人となった劉大鵬の旧居



話を聞いた後、村民委員会に立ち寄り(写真6を参照)、書記長らに村の中を案内してもらった。途中、科挙に合格して拳人となった劉大鵬という人物の旧居があった(写真7を参照)。

2 霍州市農村

霍州市までは山西大学中国社会史研究中心執行主任の郝平氏が運転手付きで案内してくれた。まず霍州市水利局を訪ね、水利に関する概略を説明してもらった後に、「四社五村」の中核的な村である霍県義旺村を案内してもらった。

(1) 霍州市水利局

時間：2007年12月17日昼

写真8. 霍州市水利局

聞き取り場所：霍州市水利局(写真8を参照)

聞き取り対象者：安五達(霍州市水利局工程師)

安五達氏は、太原理工学院水利專業を卒業した。フランスの研究者が四社五村を調査した時、安五達氏を訪問してきた。



- ・四社五村で水利站の利用ルールをめぐる最近もトラブルが発生した。四社五村の水利は全て飲用水である。
- ・霍州市の主要な河川である汾河は霍州市内を31kmほど流れており、汾河には9つの支流があり、1万畝以上の灌漑区としては十里舖灌区(機電泵站・揚水站)・七里峪灌区・城郊灌区の3か所の灌漑区があり、約4万畝の水田が灌漑された。
- ・2002年～2005年、「飲水解困工程」によって4.5万人の飲用水問題が解決され、それは義旺村や劉家庄を含む69の行政村に及んだ。
- ・四社五村の「水利工程」によって、2003年、水源が不足していた義旺村では1つの井戸が掘られ、水道管が村までつながり、村に貯水池が作られ、村の飲用水問題が解決された。義旺村の以前の貯水池は石で作られており、その貯水量は400立方_呎だったが、コンクリートで新たに作られた貯水池の貯水量は200立方_呎あり、その水は主に劉家庄・琵琶園・柏木溝に提供された。

- ・ 2003年の「義旺水利工程」の経費は総額140万元で、そのうち、国家が55万元、四社五村が71万元、地方政府(臨汾市と霍州市)が残りの14万元を支出した。
- ・ 四社五村は2つの県にまたがって存在しているので、政府が介入しにくく、山西省では『水利工程管理条例』が定められていたが、政府は村の伝統的な水利権を尊重し、四社五村の中心的な村で、最も大きな社である義旺村に調整を任せていた。
- ・ 洪洞県側の村が井戸を掘って水利問題を解決したため、1980年代以降、村同士での水のトラブルは少なくなった。
- ・ 現在、義旺村には200mの井戸があり、洪洞県側には170mの井戸がある。

(2) 霍県義旺村

時間：2007年12月17日午後

聞き取り場所：霍県義旺村内のガソリンスタンド

聞き取り対象者：郝繼紅(義旺村の元書記長) (写真9を参照)

写真9. 郝繼紅(右から5人目、手を組んで立つ筆者の右隣り)



霍州市水利局幹部からの連絡を受けていたからであろうか、村の幹部たちが大勢集まっていた。

- ・四社五村とは4つの社(洪洞県の橋西村・橋東村・杏溝村と霍県の義旺村・南李庄村)と5つ目の村(霍県孔澗村)の総称である。
- ・政府の呼びかけに応じて農業機械化を進めた。すなわち、1975年までには「手扶」トラクター(小型トラクターで、村の工場で生産した醤油と酢を運ぶ)と大型トラクター(運輸業用)を村が全額負担で購入した。村の工場(社隊企業)による収益でトラクターを購入することができたし、その工場で作られた醤油と酢を運送する必要もあった。醤油の原料である大豆や酢の原料である高粱・麦麴は村内で生産された。トラクターの軽油は県の農業機械局から配給された。
- ・1970年代、水利をめぐる紛争が発生した。
- ・取水は、旧暦を用い、洪洞県が14日間、霍県が14日間と決められ、洪洞県の橋西村・橋東村・杏溝村と霍県の義旺村・南李庄がそれぞれ7日間、霍県の孔澗村が3日間(そのうち、1日は隣村の劉家庄)となっていた。
- ・毎年、「祭社」(「祭」を主催する当番の村)が5つの村から費用を徴収して水源を見て保守点検・工事を行う「小祭」とその工事終了後に工事の点検を行う「大祭」が催され、清明節の時に「吃蒭看戲」(宴席を設け、芝居を見る)が行われる。その費用は当番の村が負担し、1980年代には3日間で数千元から1万元を要した。その後、数百円で映画を上映するようになり、2000年以降は映画の上映もしなくなった。
- ・1970～80年代、四社五村以外にも柏木溝・桃花・川草・窑垣などの村も取水するようになったが、これらの村には水の管理権はなく、干魃が発生した時は、四社五村の取水が優先された。
- ・1981年、大洪水が発生し、水利施設が破壊された。四社五村が洪洞県・霍県政府に救済を要請したが、拒否されたので、区政府に救済を要請した。
- ・1981年、北京師範大学の董曉萍とフランス人の藍克利(注5)を参照)の調査によって「水冊」(水利のルールを記した冊子)が発掘された。彼らは村を3回訪問した。

- ・ 四社五村の「水冊」は漢代に作られ、元末に消失したが、明初に再び作成された。
- ・ 小麦の収穫作業は村同士で助け合う。洪洞県の橋西村は海拔が低いので早く収穫することができ、霍県は海拔が高いので収穫時期が遅いので、まず霍県の農民が洪洞県で小麦の収穫を手伝い、その後に洪洞県の農民が霍県で小麦の収穫を手伝った。

聞き取りを終えた後に、晋水の水源地に案内してもらった(写真10を参照。上に「一衣帯水」と記されている)。ただし、本来の水源地はそこから少し離れたところにあったという。

写真10. 晋水の水源地



おわりに

今回訪問した村は、四社五村を除くと、全て都市近郊農村であり、脱農化・都市化がかなり進展しているという印象を受けた。聞き取り対象者の高齢化をも勘案すると、可及的速やかな本格的調査を行う必要があると改めて感じさせられた。

今回の予備調査によって、山西大学側がすでに調査した村に関してもなお聞き取りを行うべきことが多々あると実感するとともに、村幹部や老農民に対して聞いてみたいことがより一層彷彿として生じてきた。

今後は、戦前に日本側が調査を行った平遙県南政村も都市近郊農村の1つ

として調査に加える以外に、同じ平遙県でやや遠隔地農村として、かつ土布生産地としても著名な岳壁郷南載村も訪問する必要があるだろう。

本稿は、予備的な中国農村調査の簡単な報告書であると同時に、今後の中国農村調査研究にとって資料としての意義を持つものである。

今回の予備調査において、極めて限られた短い時間だったにもかかわらず、予期していた以上に順調に聞き取りができたのは、山西大学中国社会史研究中心の主任であり、山西大学副校長でもある行龍氏⁸⁾の積極的な支援をはじめ、山西大学中国社会史研究中心の多くの方々の全面的な協力の賜物である。特に、郝平氏と常利兵氏には多忙な中にもかかわらず、貴重な時間を費やして多くの農村を案内していただいた。ここに改めて謝意を表しておきたい。

注

- 1) 行龍・劉素林「剪子湾村田野調査随感」(『当代中国研究』第6号, 2006年7月), 行龍「追尋集体化—剪子湾村田野調査札記」(華中師範大学中国農村問題研究中心『中国農村研究』2004年巻)。常利兵「從事情到事件: 村庄与国家關係の生成—以集体化時代剪子湾村為例」(『国家行政学院学報』2008年刊行予定)。章開沅「尋夢無痕—西北尋根隨筆」(『尋根』総第78期, 2007年8月)の中でも「剪子湾尋夢」として言及されている。
- 2) 王海主編『古村赤橋』(山西人民出版社, 2005年)。常利兵『村庄叙事: 1937—1957年の赤橋社会—一項歴史社会学的個案分析』(2005年6月に山西大学に提出された修士論文)。
- 3) 華北交通株式会社資業局編『北支農村の実態—山西省晋泉県黃陵村実態調査報告書』(龍文書局, 1944年)。
- 4) 小店村志編纂委員会編『小店村志』(山西古籍出版社, 1999年)。
- 5) 董曉萍・(フランス) 藍克利著『不灌而治—山西四社五村水利文献与民俗』(中華書局, 2003年)。
- 6) 臨汾市郊外の高河店村における聞き取り調査は、三谷孝氏を研究代表者とする科学研究費補助金(基盤研究(B)(一般)「中国内陸地域における農村変革の歴史的研究」2005年度~2007年度)による中国農村訪問調査の一環として実施されたものである。
- 7) 南政村に関する調査報告書として岩本光男『山西省農村概況調査—平遥ニ於ケル生産分析ヲ中心トシテ』(北支派遣軍篠塚部隊經理部, 1941年)があり, また, 山本達弘「平遙土布の生産形態(上)」(『満鉄調査月報』第23巻第1号, 1943年1月)24~39頁によれば, 南載村において調査を行ったという。
- 8) 行龍主編『近代山西社会研究—走向田野与社会』(中国社会科学出版社, 2002年)。